

## マンモグラフィ検診による乳がん死の低減効果なし

乳がんの早期発見を目的としたマンモグラフィ検診は世界各国で実施されているが、乳がん死の低減に対するマンモグラフィ検診の利益がどの程度あるのかを明確に示した研究は少ない。そこで本研究では、マンモグラフィ検診を受けた女性と受けなかった女性を 25 年追跡し、乳がんの発症および死亡を比較検討した。

1980～85 年にカナダの 6 州で、40～59 歳の過去 12 カ月以内にマンモグラフィ検診を受けていない女性 89,835 人を対象にランダム化比較試験を行った。44,925 人をマンモグラフィ群（5 年にわたり年 1 回のマンモグラフィ検診と乳房触診検査）に、44,910 人を対照群（マンモグラフィ検診無し）に割り付けた。平均追跡期間は 21.9 年であった。5 年間の検診期間中に浸潤性乳がんと診断されたのは、マンモグラフィ群で 666 例、対照群で 524 例であった。このうちマンモグラフィ群の 180 例、対照群の 171 例が追跡期間中に乳がんで死亡したが、この期間中の乳がんによる死亡率は両群で同等であった（ハザード比 1.05）。また、全試験期間（検診期間＋追跡期間）中にマンモグラフィ群の 3,250 例、対照群の 3,133 例が乳がんと診断され、それぞれ 500 例、505 例が乳がんで死亡。この期間の乳がん累積死亡率も両群間で同等であった（ハザード比 0.99）。追跡 15 年時において、乳がん診断数は対照群に比べてマンモグラフィ群では 106 例多く、過剰診断とみなされた。

したがって、40～59 歳の女性において、年 1 回のマンモグラフィ検診は触診または通常ケアを上回る乳がん死の低減をもたらさず、マンモグラフィ検診で発見された乳がんの 22%は過剰診断であることが示された。

出典：British Medical Journal. 2014; 348: g366